
夢想屋

HERON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢想屋

【Nコード】

N9999D

【作者名】

HERON

【あらすじ】

町の目立たない場所にひっそりと建っている店。店の前には『自分がいかに描いた世界を体験したいと思いませんか？価格はたったの諭吉一枚』という文字と、夢想屋と書かれた店の名前しか書かれていない看板。その店には、人が頭で思い浮かべている話を、夢の世界で現実に体験させることができる男がいるのだ……

D r e a m 1 夢 想 屋

町の目立たない場所にひっそりと建っている店。店の前には『自分が思い描いた世界を体験したいと思いませんか？ 価格はたったの諭吉一枚』という文字と、夢想屋と書かれた店の名前しか書かれていない看板。

その看板を見た町歩く人々は、看板に書いてある現実離れた言葉の不気味に感じたり、どこぞの宗教団体だと思って店の中に入ろうとはしない。

しかし、藁にもすがる思いで店の中に入る人もいれば、現実離れた不気味な言葉。つまり、未知の世界に興味を抱く人だって多くはないが存在する。

今日も、そんな人たちの中にいる一人の女性が看板を見て興味を抱き、店の中に足を踏み入れる。

店の中に入った女性なのであるが、どうも人がいる気配がしない。女性は、おかしいな？ と思いながらも、このまま帰るのもなんだかしゃくなので、「すいませ〜ん！ 誰かいませんか！」と大声で店の中に向かって声をかけた。

すると店の中から、細身で長身の体型をした若い男が女性の前に現れ、「すいません。店が店なもので、滅多にお客様なんて来ないものですから」と言い、軽くお辞儀をした。

「そうなんですか。私は看板を見て、夢があつていいなとか思いましたけど」

女性は、男の言葉を軽く受け流し、自分の話にもっていかうとした。

「早速質問なんです、自分が思い描く世界を体験したいと書いてありましたけど、具体的にどんな体験をさせていただけるのですか？」

「それは奥の部屋でゆっくりと説明いたします。立ち話も疲れるでしょう？」

それもそうだと思つた女性は首を縦に振つて頷き、男に着いていった。

男が案内した部屋にはテーブルと椅子しかない、ある意味不気味な部屋であつた。

部屋に入った二人は、まず椅子に座る。そして、男が具体的な説明を始めた。

「それでは説明をさせていただきます。この店で体験していただくことは、文字の通り、自分が思い描く世界を体験していただきます。例えば、自分がお姫様になったという話を頭に思い浮かべたします。そこで私が、あなたが頭で思い浮かべた話を、夢の世界という形で実現させましょうということです。ここまでは理解できましたでしょうか？」

「えっと……どういうことを体験するのかは分かったのですが、どうやるのですか？ それといった機械とかも見当たらないのですが……」

「機械なんて使用いたしません。全て私の力で行います」

そういった男に対し、女性は思わずアハハと笑ってしまった。

「そんなことできるわけじゃないですかあ。冗談は駄目ですよ」

アハハと笑いながらそう言う女性に対し、今度は、男がハハツと笑う。

「ここに来た人は皆そう言います。まあそれは体験していただくときに分かりますよ。とりあえず、説明を進ませていただきます」

「これは注意事項なんです、申し訳ない話、あなたが思い描く世界通りに話が進むわけではありません。私は、あなたが思い描く世界の世界観や設定は作ることが出来ませんが、内容までは作れないのです。ですので、必ずしもあなたが思っている結末は迎えられないかもしれません。いい結末になるのも、悪い結末になるのも、あなたの行動と、夢の中の人物の行動次第です」

少しずつ複雑になってきた説明ではあるが、女性はなんとか理解した。そして、女性から男に質問を問いかける。

「ということは、私の意識は夢の世界に運ばれるということですよね？ その夢の世界での体験は、どれくらいの時間体験できて、夢の世界に行っている間。現実世界での時間の動きはどうなるのですか？」

「いいところを質問してきますね。体験時間は基本的に一生です。夢の世界なので年をとることはありません。夢の世界だってこの世界と同じように時代は変わっていくので、余程の時代を過ぎさない限り終わりが来ることはありません。もう十分体験したなあと思わ

れたときに私に言うてくださればすぐにこの世界にお戻しいたします。もう一つの質問のほうは、夢の世界の十年間が、この世界の一秒と考えていただければOKです」

それから男の細かい説明は続いた。女性もなんとか理解はしたようで、今からどんな風に夢の世界の体験が出来るのかワクワクしているようである。

「それでは、頭の中に自分が体験したい世界を思い浮かべてください」

女性は、言われたとおりに頭の中に体験したい世界を思い浮かべた。

男は女性の額に手を触れ、何か呪文のような言葉を唱えている。

その瞬間。女性の意識がフツと遠のき、何か別世界へと連れて行かれるような感覚に襲われながら意識を失った。

D r e a m 2 夢の世界

「起きてください。着きましたよ」

「う……うん……えっ。すごい！ なにこれ！」

男に起こされた女性が見た光景は、さっきまでのテーブルと椅子しかない部屋とは違い、地面は数々の植物が生えており、周りに木が並ぶ森林であった。

この光景に女性は辺りをキョロキョロ見渡しながら「すごい」とはしゃいでいる。

そんな女性の姿を見た男は、自信気に「驚くのはまだ早いですよ」と声をかけ「あああ！」と大声で叫んだ。

すると、森に住んでいる動物達が「なんだい。うるさいなあ」とゾロゾロ出てきたではないか。

そう。女性が体験したかった世界は、動物と会話ができる世界。女性は動物が大好きなのだ。

「すごい！ ドクター・ドリトルを見たときから、動物と会話するのが夢だったの！ ありがとう！」

女性は男の手を握り、ブンブンと男の手を振りながらそう言った。男は、落ち着きの無い女性に「ハハハッ……」と愛想笑いをしながら声をかけた。

「まあまあ……ここは落ち着いて動物との至福のひと時を過ごそう

「じゃありませんか」

女性は力強く頷くと、早速、動物に声をかけにいった。男も、やれやれといった感じで女性の後ろを着いてゆく。

女性が動物達と話しているときの姿は活き活きとしていた。

初めのうちは女性を警戒していた動物達だが、女性の積極的で楽しそうな態度に、徐々に警戒心を解き、一時間もすれば笑いながら会話をしていた。男も、そんな女性と動物達の楽しそうな会話を、にこやかな表情で聞いていた。微笑ましい限りである。

しかし、そんな微笑ましい光景も長くは続かない。急に動物達が怯えだし、警戒心を強めたのである。

「どうしたの!？」

女性は動物達の急な行動に驚き、思わず問いかけた。

「人間どもが僕達の住んでる森を破壊しに来たのさ。だから遠くへ逃げるんだ。僕達知ってるんだ。二人みたにいい人間もいれば、森を破壊しに来る奴らみたいに嫌な人間もいるって。じゃあね二人とも。二人みたにいい人間と知り合えてよかったよ」

動物達の中の一匹がそう言葉を返し、遠くのほうへと去っていった。

動物が去った後、女性にさっきまでの活き活きとした姿はなく、鬼のような形相でどこかへ走り去っていった。それを男が追いかける。

女性が向かった先は、森林伐採に来た人間達のところだった。

森林伐採をしている人間達を見た女性は、狂ったように「やめなさいよ!」と叫びながら、森林伐採をしている人間達を一人づつ突き飛ばした。

「何すんだよ!」

突き飛ばされた人間達は、女性に大声でそう叫んだ。

「なんで森林伐採なんかするのよ! 動物達が可哀想じゃない。どんどん行き場を失っていくのよ!」

「そんなの俺達は知らねえよ! そんなこというあんたは、家がなくて生きれるか? 紙がなくて生きれるか? 木は俺達人間に必要なんだよ。そんな甘いこと言ってられないんだよ!」

動物達が可哀想だと訴えた女性だが、森林伐採をしている一人の人間の言葉に、返す言葉がなかった。

女性は少しの沈黙の後、黙ってどこかへ走り去っていった。男は急いで女性を追いかける。

男が追いついた先で見た光景は、女性がしゃがみこんで静かに泣いている姿だった。

「大丈夫ですか? もう体験を終えましょうか?」

男が心配そうに女性にそう尋ねると、女性は首を横に振り「少しの間、一人にして」と小さな声で男に言葉を返した。

男は「分かりました。体験を終えなくなったらいつでも呼んでください」といい、しばらくの間どこかへ姿を消した。

二時間後くらいであろうか、女性の呼び声がしたので、男はすぐさま女性の下へ駆けつけた。

「私を現実の世界へ戻してください」

さっきまでのパニックになっていた女性とは違い、落ち着いた声で男にそう言った。

男は静かに頷き、夢の世界に女性を連れてきた時と同じように、女性の額に手を触れ、呪文のような言葉を唱え始めた。

あのときのように、女性の意識が遠くなり、別世界に連れて行かれるような感覚に襲われながら意識を失った。

男に起こされ、意識を取り戻した女性は現実の世界に戻ってきていた。つまり夢想屋にいた。

「お疲れ様です。色々大変でしたがどうでしたか？ あなたの理想とした世界の感想は」

「動物と話せたのは最高の時間でした。森林伐採の出来事は胸が痛くなったけど、おかげで一つ気づけたことがあったんです」

男の問いかけに、何か決意をしたような表情で言葉を返した。

「私。環境保護団体に入ります。少しでも森林伐採をなくす努力をしたいんです。森林伐採を全てなくすのは無理だって分かった。でも、工夫次第では少しずつでも森林伐採をなくしていけると思うの。」

だから私は、環境保護団体に入って、色々な事を学ぼうって思った。ありがたい。いい体験ができました。お代はここに置いときますね」

女性は、諭吉を一枚テーブルの上に置くと、一つお辞儀をして店を去っていった。

「私も何かしないといけないなあ。無駄な紙を使用するのをやめたり、自分の箸を持ち歩いて外食したりするのもありでしょうか……色々考えちゃいますねえ。動物も何か飼いたくなったなあ。でも、私にはお金がない……そうだ。ハムスターにしよう。ハムスターなら私にでも飼えそうだ」

男が独り言を呟いた。これは夢屋に来た客が帰った後、ほぼ毎回することで、癖になっている。

次の日。男の店からメモ用紙やらの紙は消え、テーブルの上には一匹のハムスター、通称ハムが飼われていた。

D r e a m 3 道

「いらっしゃいませ。どうぞこちらに」

男が、来店した客に挨拶する。

夢想屋にやってきた客は、小学校中学年くらいの女の子と、その母親の二人。女の子が偶然看板に目を通したところ、興味津々になったらしい。

そして男が母親に夢想屋についての説明をした後、男が女の子に優しく声をかける。

「ねえ夏樹^{なつき}ちゃん。夏樹ちゃんがいつも楽しく考えてることを話してくれないかな？」

男も、流石に小学生の夏樹に、頭の中で体験したい世界を想像させるのは無理だと思ったので、会話することによってあらわれる想像力を引き出そうと考えたのだ。

しかし夏樹は、男の問いかけにとっても驚いているようである。

「えっ。なんで私の名前が分かったの！？もしかして超能力！？」

「夏樹ちゃんのお母さんに聞いたんだ。超能力でもなんでもないよ」

男は、アハハと笑いながら夏樹に言葉を返した。

夏樹は、男の普通の返答に少々がっかりしているようである。

「な〜んだ。でも、ずる〜い。人の名前を知ったら自分の名前も教

えないと駄目なんだよ。先生言ってたもん」

夏樹は、ムスツと口を膨らませてそう言った。母親は「そんな失礼な口聞いちゃいけません」と夏樹を叱った。

「まあまあ。夏樹ちゃんの言うことのほうが正しいですよ。私の名前は雨鏡うきょうといいます」

雨鏡が丁寧にそう答えると、夏樹は「オッケー！」と、笑顔で言った。

「じゃあ、夏樹ちゃんがいつも楽しく考えてることを私に話してもられますか？」

すかさず、雨鏡が話を本題に戻す。

「うん！ 雨鏡さんとはもう知り合いだもん！」

夏樹は楽しそうな顔で雨鏡に話した。夏樹の話はとても純粹で、ストレートに夢のある話。子どもらしい話に雨鏡も楽しそうに夏樹の話を聞いた。

「とっても楽しい話でした。これは私も作りがいがありますねえ。では失礼」

雨鏡は、母親と夏樹の額を触り、いつも通り、呪文のような言葉を唱え始めると、二人の意識が遠くなり、意識を失った。

「起きてください。着きましたよ」

「うん……」

雨鏡に起こされた二人が眠たそうに起き上がる。母親は、起き上がった途端に目が覚めたように驚いたのだが、夏樹はもつと凄かった。

「凄い！ 凄いよ雨鏡さん！ どんなマジック使ったの！？」

夏樹が驚くのも無理はない。さっきまで店の中にいたのに、今はまったく違う世界にいるのだ。

その世界は、周りが花畑に包まれており、ウサギの人形やらクマの人形やらがそこら中に散らばっているのが見える。

「それは企業秘密ですよ。それよりも、せっかく来たんですから遊んできたらどうですか？ でも、遠くに行つてはいけませんよ。迷子になっちゃいますからね」

「うん！ 遊んでくる！」

夏樹は、さつき雨鏡に遠くに行つちゃ駄目だと言われたのに、遠くのほうへと走り去つていった。

「あつ、待ちなさい夏樹！」

母親が走り去つていった夏樹を追いかける。雨鏡も母親の後ろを追った。

二人が夏樹を追っている途中、急に夏樹がピタッと止まった。夏樹がピタッと止まったので追いつくことが出来た二人は、夏樹

に駆け寄る。

「夏樹！ 遠くに言っちゃ駄目って雨鏡さんに言われたでしょ」

母親が夏樹を叱る。

「まあまあ。夏樹ちゃんも悪気があつて遠くに行ったわけじゃないと思いますよ。ちゃんと道が二手に分かれているところで立ち止まったことですし……これ以上進んだらいけないって思ったから立ち止まったんだと思いますよ」

夏樹を叱る母親を、雨鏡がなだめる。

「うん。これ以上進んだら迷惑になると思ったの……でも、遠くに行っちゃ駄目って言われたのに、行くのはいけないよね。ごめんなさい。ちょっとはしやぎすぎちゃった」

夏樹も反省しているようで真剣な表情で母親と雨鏡に謝った。

母親も雨鏡も、夏樹がちゃんと反省していると心で感じたようで、ニツコリと微笑んで夏樹を許した。

「とにかく、どっちの道に行くかですよ。時間はいくらでもあるわけですし、ゆっくりと一つずつ回っていきましょうか」

雨鏡の提案に母親は納得した。しかし、夏樹が納得した表情を見せない。何か不満があるみたいだ。

「なんだかこっちの道がいい気がするの。うん。こっちがいい」

夏樹が行きたい道を指差す。この夏樹の行動に、二人は驚きを隠せなかった。

夏樹が指差した方向は、花畑の間に広がる道ではなく、花畑の中を歩こうというのだ。

「危ないわ。駄目よ夏樹！」

「そうですよ。危ないです。それに花畑なんだから、回っていけばいずれ夏樹ちゃんの行きたい方向の先にも着けます。だからゆっくりと回っていきましょうよ」

二人は、夏樹の提案を危ないと否定する。確かにそうだ。同じ花畑なんだから回り道をすればいずれ花畑を歩いていった先に着くはずなのだ。しかし、夏樹は納得しようとはしない。

「こっちの道がいいの！」

夏樹はそう言うと、花を踏まないようにゆっくりと花畑の中を進んでいった。

「夏樹！ 待ちなさい！」

二人も、夏樹の後を花を踏まないようにゆっくりと追いかける。

そのままゆっくりと花畑の中を進んでいくと、花畑の中を通り抜け、道にでた。

「夏樹！ あなたって子は……」

花畑を抜けた先にあつた光景に、夏樹を叱ろうとした母親も言葉を失った。当然。先に花畑を抜けた夏樹も言葉を失っている。そして、この世界を作った張本人の雨鏡でさえも……

花畑を抜けた先では、たくさんの人形達が歩き回って、喋って、楽しそうにしているのだ。これこそ正に夢の世界である。

しばらくして、夏樹が「ほらね！」と言ってニツコリと二人に微笑むと、人形達の輪の中に入ってしまった。夏樹は人形が大好きで、立ち止まっていられなかったのだ。

「あつ、夏樹！ 勝手に……」

「まあまあ。いいじゃないですか。見てください。あの夏樹ちゃんの楽しそうな顔。もし、あの人形達が夏樹ちゃんに危害を加えたりしたら、私が無理やりにも元の世界に戻しますから。少しの間。人形達と遊ばせてあげましょうよ」

勝手に行くのを止めようとした母親を雨鏡が止めた。母親も納得し、二人で人形達と遊ぶ夏樹を見ていた。

最初は心配そうに見ていた母親だが、楽しそうな笑顔で人形達と遊ぶ夏樹を見て、次第に母親自身の顔も緩み、微笑ましく眺めていた。

そして、夏樹が人形達と遊び終わり、体験が終了。元の世界へと戻った。

「お疲れ様です。夏樹ちゃん。楽しいひと時を過ごせましたか？」

「うん！ 花畑も綺麗だった！ 人形達と遊んだのもとってもとても楽しかった！ ねえ。雨鏡さん。また来てもいいかな？」

「ええ。いつでも来ていいですよ。また楽しい世界を見せてくださいね」

雨鏡は、ニッコリと夏樹に微笑みそう言った。夏樹もニッコリと微笑み「うん！ 絶対に来るからね！」と返す。

「雨鏡さん。ありがとうございます。お代はここに置いときますね」

母親と夏樹が雨鏡に微笑みながらお礼を言うと、店を去っていった。

「子どもの勘というのは凄いなあ。あそこで回っていればあの場所にたどり着かなかったかもしれない。質問に書いていない答えを当てるようなのですか……それにしても子どもが欲しくなったなあ。今となつては夏樹ちゃんのような純情な心なんて私にはないもんなあ。あつ、その前に彼女もいないんだ私……」

雨鏡は、自分に彼女がいないことを再確認すると、ガックリした。

「はあ……ハム。私はどうすればいいのでしょうか……？」

ついにはハムに悩みを相談した。相当ショックだったらしい。

相談されたハムは、こんな状態の雨鏡を見て「今、どうすることもできない悩みを気にする前に飯をくれ」と思いながら雨鏡を見ていた。

D r e a m 4 我慢の源さん

「そんな細かい説明はいらねえよ。ちゃっちゃとやっちゃってくな」

今回、来店した客は、町でも有名な我慢強い男で、町で度々行われる我慢大会のレジェンドの称号を持つ男。我慢の源^{げん}さんと言われている。

そのせいなのか、とても頑固で面倒くさい事が大嫌い。

なので、雨鏡がいつものように説明を始めたのだが、源は面倒くさいことが嫌いなので、すぐに始めてくれと言っているわけだ。

「分かりました……とりあえず、体験したい世界を頭で浮かべてください」

雨鏡は、困り気味でそう言う。

「あいよ。これでいいのかい？」

「はいOKです。では」

雨鏡がいつものように呪文のような言葉を唱え、源を夢の世界へと連れてゆく。

「起きて……あれ？」

雨鏡は不思議に思った。客を夢の世界に連れて行った後、客は必ずといっていいほど眠っているもの。しかし、源は眠っておらずピ

ンピンと自分が体験したい世界を見回していた。

「おう。凄えなあんだ。完璧だぜ」

源が上機嫌で雨鏡に話しかける。

「どうもありがとうございます。それにしても、作った私が言うのも何ですが、奇妙な世界ですよねここ。この世界で何をするおつもりで？」

雨鏡が疑問に思うのも無理はない。その世界は大地が赤く、周りには溶岩があり、辺りを見回しても見えるのは大きな城のような建物が一つだけ。イメージするならば、地獄といったところだろうか。

「決まってるじゃねえか。この世界で来月の我慢大会に向けて修行するのよ。地獄ならちったあ骨のある我慢が出来るかと思ってよ」

「ほお。それはそれは。納得いたしました」

雨鏡は、奇妙な世界の原因を納得したと同時に、夢の世界に連れて行った後のピンピンした姿も、あまりにも我慢する意識が強く、夢の世界へ連れて行くときの衝撃すらも我慢してしまったのだろうと、頭の中で勝手に納得した。

「じゃあ、俺は早速あそこに行って地獄の罰を受けにいつてくらあ」

「ええ。行つてらっしゃい。私は、ここであなたが罪を償い終わるまで待ってますよ」

源は、城のような建物へ走りながら向かっていった。

「まさか、何もしてないのに自分から罰を受けに行くなんて……設定上、罰も我慢に関する事になってるから死にはしないと思うけど大丈夫でしょうかねえ……色々な意味で心配だなあ……」

雨鏡は、いつものように独り言を呟きながら源の帰りを待つ。

一方、源は建物の中に足を踏み入れていた。

そこでは、閻魔様のような風貌をした鬼が一体と、それを取り囲む鬼達が数十体おり、罪を犯し、地獄へ落とされた設定になっている源に罰を下す。

「そなたは現世で逃れようのない罪を犯した。よって、そなたに三つの罰を与える」

閻魔様は、源を睨みつけながらそう言うと、三つの罪を宣告する。

「一つ！ 色彩の刑！ 期間1000年！」

色彩の刑。周り全てが同じ色をした部屋に入れさせられる。色は1000年ごとに変わる。

「一つ！ 感覚の刑！ 期間1000年！」

感覚の刑。体の動きを封じられ、1000年もの間、頭の上に水滴を一滴ずつ垂らされる。

「一つ！ 孤独の刑！ 期間500年！」

孤独の刑。その名の通り、500年の間、何もない部屋に入れさ

せられる。当然。誰も声もかけないし、窓もないし、ドアもない。本当に何も無い空間である。

閻魔様がそう罰を下すと、閻魔様を取り囲む鬼達が、一つ目の罰である、色彩部屋に源を連れて行った。

源は、この部屋で1000年過ごすこととなる。当然。死んだ設定なので年はとらないし腹も減らない。

源は、色彩の部屋に入り込むと、床にドサツと座って辺りをジッと見渡した。

しかし、どこが左なのだか右なのだかも分からない。全てが同じに見えるので、普通の人なら途中で狂い発狂するであろう。しかし、源は違った。

この状況を楽しんでいたのだ。勝手にどこが左なのかを当てて楽しんだり、1000年ごとに変わる色彩がどの色になるだろうと予想していたらあつという間に1000年のときが流れた。

次の感覚の刑も、普通の人なら、一定の間隔で頭に一滴ずつ水滴が落ちてくる終わりのない恐怖に発狂してしまうはずなのだが、源は、水滴の数を1000年の間、ずっと数え続け、感覚の刑も楽にクリアした。

そして、最後の孤独の刑。これは前の二つと違い刑期が半分だ。なので、余裕だろうと思っていた。

だが、それは違った。源は、いつものように頭で色々考えながら200年過ごした。

しかし、それ以上はネタがでてこなかった。孤独の部屋にはネタにするものなど何もない。これから300年は、彼にとって地獄だ

った。

源は、必死で孤独を我慢した。我慢が出来そうにないときは、手淫などで気を紛らわした。しかし、100年もすると、もう手淫じや気を紛らわせない程の精神状態になっていた。

更に100年。源はついに発狂する。「もういいだろうが！ここから出してくれ！」「何かくれよ！飯でも景色でもなんでもいい。なんかねえのかい！」「そんな事を発狂し始めた源にとって、残りの100年は、今まで罰を受けた2400年よりも長く感じた。

そして、長い長い100年が過ぎ、源は刑期を終えた。

源はまだ狂っていた。どこを向いているか分からない目。何かブツブツ言っている口。意味もなくヒクヒクさせている頬。フラフラな足取り。

そんな状態で雨鏡の下へ帰ってきたものだから、雨鏡は急いで元の世界へと戻った。

源は元の世界へ戻った後も狂っていたが、しばらくして正気に戻った。

「大丈夫ですか！？ちゃんと理性は保っていますか！？」

源の目が正常に戻ったのを確認した雨鏡が、大慌てで源に話しかける。

「温けえなあ。温けえ。俺を見てくれる人がいるだけで温けえ。あなたのお陰で我慢の修行以外にも色々なこと学ばせてもらったよ。ありがとな。あんたも、人との関わりは大事にするんだぜ」

源は、雨鏡の手をギュツと握った後、お代を置いて店を去った。

「あつ、ちよつと……行っちゃいましたか……精神のほうは大丈夫なんでしょうか。あれだけ我慢強いであろう源さんの精神が折れてしまつくらいなんですから、もう、こういう危なそうな体験は危険だからやめといたほうがいいなあ。でも、最後には学ばせてもらつたとか言つてたし大丈夫でしょうか……そういえば、人との関わりは大事にしろつて言つてましたねえ……人との関わりかあ……そういえば私、ここに来るお客様以外に関わりがある人がほとんどいないなあ……でも！」

雨鏡は、ハムの方をクルツと振り向いた。

「私にはハムがいます。それだけで十分です。ねえ。ハム」

雨鏡はニコツと微笑み、ハムにそう言った。

ハムは、こんな雨鏡を見て「気持ちわる……」と思いながらヒマワリの種をかじっていた。

D r e a m 5 新たなる世界

「ほお。そういう考え方もありましたか」

今回の客は、30歳くらいの年齢であろう女性。この女性も看板を見て興味を引かれた人間の一人だ。

しかし、この女性は、自分の思い描いた世界を体験したいから夢想屋に来たのではない。女性には、思い描いた世界とは違う夢の世界を体験したいので夢想屋に来たのだ。

女性は、自分がしたい体験に関することを雨鏡に質問した。
その質問に対し、雨鏡は思わず感心してしまったのだ。

「分かりました。一度やってみましょう。それでは、その世界を思い浮かべてください」

雨鏡が女性にそう言うのと、いつものように女性を夢の世界へと誘う。

夢の世界に着き、女性がパツと目を開けたその場所は、とあるライブハウスの前。

「凄い……まったく同じだわ……」

女性は、あまりの出来事にライブハウスをジッとみつめながら驚いている。

「へえ。ここが思い出のライブハウスなんですな」

女性が見たかった世界。それは過去を見ることが出来る世界。この世界は、自分が本当に体感した出来事をもう一度見ることが出来る、過去のリプレイ再生世界なのだ。

「そうなの。私にはロックバンドだった夫がいるの……」

女性は最近、そのロックバンドの夫と喧嘩し、この先やっていくか不安になっていた。

なので、不安を取り除くため、愛の再確認がしたいと思い、過去の自分の思い出を見たいと思っていたのだ。

「あつ！ すいません。こっちに来てください！」

女性が急に大声を上げ、雨鏡にそう言った。

「ど、どうしたんですか急に！」

重く心境を語っていた女性がいきなり大声を上げたので、真剣に聞いていた雨鏡はとても驚き、思わず飛びはねてしまった。

「すみません……頭がこんがらがるとような話なんですけど、昔の夫と昔の私が近くにいたのを発見したのでつい。それに、これはとても思い出深いシーンなんです」

女性は、今の状況を、映画のワンシーンを教えるような感じで雨鏡に説明する。

「それは確かに驚くのも無理はありませんね」

雨鏡が納得していると、人気の無い路地裏で、昔の女性が緊張し

た顔つきで昔の夫に何か話しかけようとしている。

「あつ、ここじゃ昔のお二人の会話が聞こえてしまうので、どこか遠くのほうへ行っていていましょうか？　せつかくの思い出深い話に、関係ない私がいたら雰囲気も冷めてしまうでしょうし」

雨鏡は女性に気を遣い、女性にそう尋ねる。

「いえ。気になさらずここにいてください。確かに自分の思い出を人に見られるのは恥ずかしいけど、夫との思い出は、そんなこと気にならないくらい素敵な思い出なんです」

女性は雨鏡にニコツと微笑んだ。

この言葉を聞いた雨鏡はホツとした。夫と女性は仲直りすると確信したのだ。

そして二人は昔の夫と昔の女性の思い出を盗み見る。なんだか不思議な感覚である。

「私、ドジだしすぐに怒っちゃうし家事もそれほど上手じゃない。こんな私でも一生ついてきてくれますか？」

どうやらプロポーズのシーンらしい。この女性の言葉に、夫は一度深呼吸をし、女性の目をジッと見ながら言葉を返す。

「留美……ありがとな。でも、今は留美に返事を返すことは出来ない」

「今じゃ駄目なの？　私、どんな答えが返ってきてても博人を責めたりしないよ。だって、私が博人を好きだっていう事実是不変わらない

もん」

留美のこの言葉に、博人は一枚のチケットを留美に渡した。

「今日のライブのチケット。俺は、音楽に命懸けてる男だ。だから、俺は音楽で答えを示すよ。だから今日のライブ絶対に来てくれ。そういや、俺が留美をライブに誘うのは初めてだよな。こんなことでしか答え示せなくてごめんな」

博人は、留美にそう言うのとライブの時間が迫っているのでライブハウスへ向かった。

留美は、博人にもらったライブのチケットをジッと眺めていた。

「大丈夫ですか留美さん。はい。ハンカチです」

「ありがとうございます……」

雨鏡が、博人との思い出のシーンを見て号泣している留美に慌ててハンカチを渡した。

その後も留美は泣き続け、落ち着くのに二時間程かった。

そして二人はライブハウスへと足を進める。

普通、ライブといえばチケットが無ければ入れないのだが、ここは過去のリプレイ世界なので、過去の世界の住人には二人の姿は見えていない。なので、なんの問題も無くライブハウスに入れるのだ。そう考えると、留美の思い出のシーンも盗み見る必要はまったくなかった。

ライブハウスに入った二人。

そこには、昔の自分がいて、昔の夫がいて、今の自分がいて、たくさんのファンがいて……熱気に包まれながら今、ライブがスタートした。

たくさんのファンの声援に包まれながら進行される大迫力のライブ。いつもは長く感じる時間も、ここにいとあつという間に流れていく。そしていよいよ最後の曲。そう、留美のプロポーズに対して音楽で答えを示すといった曲である。

さっきまでノリノリだった博人も、静かに緊張した顔つきで言葉を発する。

「rumi can you hear me？」

博人が英語でそう言うのと、一度深呼吸を置いて、また言葉を発する。

「ごめんな留美。俺は音楽やってるときしか自分の言いたい事すら言えねえ大馬鹿野郎で臆病野郎だ。でも、なんでだろうな音楽やってるときはなんかこう抑えらんねえ。さっきまで伝えたいことずつと伝えられずにいたのに、今は言いたい。物凄いい言いたい。駄目だ。抑えらんねえ。留美。俺も留美が好きだ。世界で一番好きだ。例えば、次元より遠くの世界からジツと留美を見ていることになつても、ずっと留美を愛し続けてる自信がある。結婚してくれ。俺も、ずっと留美に言いたかった」

この博人の言葉に、ライブハウスでは、大きな歓声と共に大きな拍手が送られていた。昔の留美はこの言葉に涙を流している。今の留美は、ジツと昔の博人を見ている。

「俺は留美が大好きだ。だから留美に俺からの気持ちを歌にして贈る。でも、歌詞なんて作ってない。作っているのはメロディだけ。留美に対して歌詞なんて作れない。俺の留美に対する気持ち自体が既に歌詞なんだから作りようがないんだ。じゃあ、俺の気持ちをそのまま歌詞にして留美に伝えます。ここに来てる馬鹿野郎達も一緒にソウルを感じてくれ。そして留美。こんな俺を選んでくれてありがとな……じゃあ、行くぜ！」

激しいメロディと共に、純粹で、真っ直ぐで、気持ちのこもった歌がライブハウス全体に届けられる。

それを聞いた留美は泣いた。昔の留美も泣いた。博人達のファンも泣いた。留美とも博人のロックバンドとも関係の無いはずの雨鏡も、博人の気持ちさがこもった歌に涙が流れた。

そして、声援で包まれ、涙で包まれ、愛で包まれたライブは幕を閉じた。

愛を再確認した留美は、満足気な顔で元の世界へ戻った。

「本当にありがとうございました。やっぱり私には夫が必要みたいです。だって、昔の思い出を見て、こんなに嬉しくてこんなに泣けるんですもの」

留美は、さっきまでの不安が嘘のようにニコニコしながら雨鏡にそう語る。

「ええ。きっと博人さんも留美さんと同じ気持ちになってると思いますよ。博人さんも、留美さんとの思い出を思い出して泣いてる頃じゃないでしょうか」

雨鏡もニコツと微笑み言葉を返す。

「そうだいいんですけどね。じゃあ、私はそろそろ家へ帰ろうと思います。この店に出会えなかったら、こんな気持ちになれなかったかもしれない。本当ありがとね」

留美は、そう言うとお代を置いて店を去った。

雨鏡は、留美が店を去った後、留美に気持ちを伝えた歌を思い出しながら、その世界に酔いしれた。

D r e a m 6 経済的事件

「いらっしゃい……えっ？ 違うのですか」

夢想屋に入ってきた高校生くらいの女性。お客様が来たと思った雨鏡であるが、どうやら違う理由で店に訪れたらしい。

「とりあえず上がってください。立ち話も疲れるでしょう？」

雨鏡は、女性を部屋に上げる。女性も「ありがとうございます」と元気よく言い、部屋に上がる。

「では、仕切りなおして。何の御用でしょうか？」

「このお店でアルバイトをしたくて来ました」

なんと女性は、夢想屋でアルバイトをしたくて店に訪れたのだ。しかし、雨鏡は困る。アルバイトをしたいなんて言ってこられるとは正直思わなかった。別にアルバイトを雇うのが嫌なわけではない。経済面での問題なのだ。夢想屋の売り上げを考えると、雨鏡一人の生活でギリギリ。とてもアルバイトを雇う金はない。

「駄目……ですか？」

雨鏡の焦った表情を見た女性が、そう質問する。

「いえ。決して駄目なわけではないんです。申し上げにくいのですが、経済面の問題で……」

雨鏡は、「アッ……アハハ……」と苦笑いで誤魔化そうとした。

「それって、アルバイト代を払えないってことですか？」

「ぶっちゃけると……そうなりますかね……」

流石にアルバイト代が払えないとなると女性も帰るだろうと思い、色々な面で残念そうにしていると、女性が急に元気よく立ち上がった。

「ということは、アルバイト代をもらわなければ働いていいってことですよー!?」

嬉しそうにそう言う女性に対し、雨鏡は啞然とした。

普通、アルバイトとはお金を稼ぎにいくものである。それを、お金を貰わないで働こうというのだ。正にタダ働きである。

これには雨鏡も疑問を持った。そこまでして夢想屋で働きたいという動機やメリットが思いつかないのだ。なので、思い切ってアルバイトをしたい理由を聞いてみた。

「夢って素敵だけど儚いものだと思うんです。夢想屋さんで行われていることは確かに疑似体験です。でも夢想屋さんでは、そんな儚い夢を疑似体験の間だけでも咲かせてくれる。それってお金では計ることができないほど素敵なことだと思うんです。だから、働きたくなりました」

この言葉に雨鏡は感激を覚えた。しかし、それと同時に疑問も覚えた。

表の看板を読んだだけでは、そこまで詳しい内容はわからない

ずなのだ。

雨鏡は、この疑問は流すべきではないと考え、なんで店の内容をそこまで知っているのか尋ねた。

「えっ。ああ。そういえば言ってますでしたっけ。私、前に一度、夢想屋さんでお世話になった夏樹の姉の春香です！」

なんと、アルバイトをしにきた女性の正体は、元氣一杯で純粹。そして、夢の世界でヌイグルミと遊んだ、あの夏樹ちゃんの姉だったのだ。

春香は、夏樹から夢想屋に関する色々な感想を聞いたのだという。その感想を話しているときの夏樹は本当に楽しそうで、夏樹の感想を聞いているうちに、段々と春香も共感していき、アルバイトをしようと思ったのだという。

雨鏡の疑問は一気に納得に変わった。そして、夏樹が今でも自分の事を覚えてくれていると思うと、嬉しくて仕方が無かった。

「そうなんですか。まさか、夏樹ちゃんのお姉様とは……こんな偶然もあるものなんですね。しかし、いくら夏樹ちゃんのお姉様だからといって、アルバイトの条件はOKできるものではありません。流石に、タダ働きでアルバイトに来てくれと言うのは気が重いですからね……ですので、明日、もう一度この店に来てください。色々と考えようと思いますので」

これには春香も納得して帰る。

雨鏡は、色々な作業に取り掛かった。

そして次の日。春香が夢想屋に足を運んだ。

「すいませ〜ん！ 春香です」

春香が雨鏡を呼ぶ。

「昨日の部屋で待っていてください。すぐに向かいますので！」

雨鏡が、春香にそう指示する。

緊張した顔つきで雨鏡を待つ春香。すると雨鏡が、何かを持ちながら春香の前に現れた。

「おはようございます春香さん。いきなりですけどこれ、名刺と名札です。やっぱりアルバイトの雰囲気をだすためにいるんじゃないかと思ひまして、昨日作りしました」

雨鏡は、春香が帰ったあの中から、ずっと名刺と名札を作っていた。そして、きつちりと時給のやり繰りも経済面と会話して決めたようで、時給400円。残業手当無しと、厳しい条件になってしまった。これが現在の夢想屋ではギリギリの時給なのだ……

「ありがとうございます！ 一生懸命働かせていただきます！」

アルバイトの採用が決定し、時給まで貰えるということでテンションがMAXだった春香。

しかし、雨鏡の表情を見て、春香のテンションが元に戻る。

「雨鏡さん、なんだか顔色が優れませんね。もしかして、この名刺と名札……」

「気にしないで下さい。徹夜で作って寝不足なだけなんで。なんせ、作ったことが無かったもんで時間がかかったんです。でも、喜んでいただけたようで何よりですよ。こちらこそよろしくお願いしますね」

このとき春香は、夏樹の言うとおりいい人なんだと思い安心した。

こうして、夢想屋に始めてのアルバイトが入ってきたのであった。

D r e a m 7 アルバイト

経済的アルバイト騒動から二週間が経った。

始めは緊張していたのか、何をするにも次にする仕事を聞いていたのだが、徐々に慣れていった春香は、ふと気づいたことがあった。

この二週間で春香がしたことといえば、あまり汚れていないこの店を掃除。その後、ハムに餌をやり、時々来る客にお茶やコーヒーを出すくらいである。

アルバイトをしている身として、春香は何か物足りなくなっていた。汗水流してお金を貰うという充実感が全く無いのだ。

なので、雨鏡に他にやる仕事はないのか尋ねた。

尋ねられた雨鏡は「ありません。お恥ずかしい話ながら、暇すぎてしてもらうこともないんですよ」と、ごまかし笑いをしながら言葉を返す。

春香は「はあ」とため息をつきながら「自分で探します」と雨鏡に言い、雨鏡のいる部屋を後にした。

「どうしようかなあ。雨鏡さんに掃除するように言われてる部屋も全部掃除したし、ハムちゃんにも餌をあげた。他にする仕事なんてこの店で何があるんだろう……」

思わず独り言を呟いてしまう。

それにしても、掃除と餌をやるくらいしかする仕事が無い店というのも珍しい話である。

「あつ。そういえば！」

春香は突如閃いた。

実はこの店は、雨鏡の家でもある。この店には、いつも店に来る客を招く部屋。つまり客部屋。その両隣の部屋には、キッチン・ソファー・テーブルだけが置いてあるリビング。雨鏡は大抵ここにいて。余計なものが何も無い空間が好きらしいのだ。そして、洗濯機と風呂が同じ場所にある部屋。

春香は、この三つの部屋を掃除するように言われている。しかし、この店にはもう一つ、春香も入ったことがない部屋があるのだ。

そう。雨鏡の部屋である。この店は二階建てで、いつもは客部屋やリビングがある一階で生活をしているのだが、寝るときだけは二階に上がり、自分の部屋で寝ているらしい。

春香は、秘密に溢れた雨鏡の部屋を掃除しようと考えた。

この二週間の間。一度も掃除するように言われなかった部屋である。もしかしたら、物凄いゴミ屋敷だったり、人には見せられないようなものが満載かもしれない。春香の想像は膨らむ一方だ。

そう考えると行動は早いもので、雨鏡にばれぬよう、音をださず、器用に階段を登っていく。

春香が思っていた最大の難関である鍵は、そもそもついていなかった。だったので、いとも簡単に雨鏡の部屋に侵入することに成功した。

秘密に溢れた部屋の中身は見事に普通で、別に汚れているわけもなく、人には見せられないようなものも見当たらない。

そんな部屋を見て、少し残念そうにしていた春香であるが、机の上に置いてあった一冊の本が目がいく。

その本の表紙には、いかにも手書きだろうと思わせる字で「思い出帳」と書かれている。

これはまさかと思い、表紙を開こうと思った春香だが、途中で手が止まる。

罪悪感である。罪悪感という名のストッパーが、春香の手を止める。

しかし、ストッパーを潰しにかかる、好奇心という名の秘密兵器が春香の手を再度動かす。

しばらくストッパーと秘密兵器が頭の中で戦いを繰り広げていたのだが、秘密兵器がストッパーを打ち破り「思い出帳」が春香の手により開かれた。

そこに書かれていたのは、今までのお客さんとの思い出。

当然。夏樹との思い出も、春香がアルバイトに来た日の事も……

じゅんとしながら続きを見ると、最後に書かれてあるページに、今考えている新たな世界の話が書かれてあった。

春香は、これだ！　と思い、「思い出帳」を持って雨鏡の下へ急ぐ。

上が騒がしいと思っていた雨鏡だが、息を切らしながら「思い出帳」を持って走ってきた春香を見ると、雨鏡は思わず「ああー！」と叫ぶ。

「な……なんで春香さんがそれを持っているんですかあ！　私の部屋に無断で入りましたね？　そして思い出帳を見ましたね！？」

雨鏡は、いつになく取り乱した表情と口調で春香を問い攻める。

「ごめんなさい。そのお……雨鏡さんの部屋が気になっちゃったもので……つい……」

春香は、雨鏡がまさかこんなに取り乱すとは思っておらず、思わず言い訳する。

「つい……じゃないですよ。まったくもお……でもまあ、近くにある見たことない部屋を見なくなるのは分かりますし、部屋に入れることはないだろうと思って、思い出帳を隠しておかなかった私にも非がありますので、これ以上怒りはしません。しかし、これだけは注意しておきます。人の部屋に勝手に入ること。人の所有物を勝手に探ること。これはプライバシーの侵害です。常識外の行動は慎んでください。いいですね？」

雨鏡は、赤面しながら春香を叱る。

「ごめんなさい……これからは、このような行動は慎みます。本当にごめんなさい」

春香は、さっきまでのテンションは嘘のように、頭を下げて謝った。まさか、ここまで雨鏡が嫌がるとは思っていなかったのだ。

「反省したならそれでよしです。それにしても、なんでこの思い出帳をわざわざ私に？　ただ見せに来たわけじゃないでしょう？」

雨鏡は、春香が反省しているのを感じると、コロッと表情を変え、優しく春香に問いかけた。

「はい。最後のページに書かれてある新たな世界の話あるじゃないですか。その世界の実験台になれないかなあ……なんて……」

さつきがさっきなので、控え目に話した春香。

「駄目です。とっても危ないことですの」

雨鏡は、危ないからとキツパリ否定する。

「でも、そんなこと言っちゃ、一生、世にはだせないアイデアになっちゃうかも知れないじゃないですか。私、新たな世界の説明を読んで、素敵だなんて思いました。このまま使われないなんてもったいないと思います。だから、私を実験台にしてください。もし成功したら使えるんですよ。雨鏡さんの世界の幅が広がるんですよ！？」

春香は一步も引かず反論する。さつきまでの落ち込んだテンションが嘘のようだ。

このとき雨鏡は、危険だと忠告しても一步も引かないところが夏樹と似ているなと思い、やっぱり姉妹なんだなと感じる。

そして、こうなったときは、何を言っても止められないと確信した。

「分かりました……でも、この世界は二つの世界を組み合わせでできる高度な世界なんです。それ故に私でもコントロールできるか分からない程、危険な世界です。もしなにかあったら私がすぐに現実の世界に戻します。しかし戻した後、春香さんが無事である保障はありません。それ程、危険なんです。それでも春香さんは実験台になろうと思いますか？」

真剣な顔で忠告する雨鏡。

「覚悟は出来てます。私、雨鏡さんの作る世界をもっと見てみたいですから」

春香も、真剣な態度で答えを返す。

「分かりました。では、ご想像を……」

張り詰めたムードのまま、雨鏡は慎重に春香の額を触り、新たな世界へと誘う。

Dream 8 春香の世界

春香がハッと目を覚ましたその先は、春香が通っている高校だった。しかも自分のクラスの前にいる。

「じ……ここは……って、ええ!？」

春香は更に驚いた。さっきまで着ていた私服とは違い、自分の通っている高校の制服を着ているのだ。

ここまで再現できるのかと、自分の制服をジロジロと見ながら思う。

すると、遠くから「春香!」という男の声が。

春香は、声が聞こえた途端に真剣な顔になり、男の方をバツと振り向く。

「よかった。やっと見つかったよ」

春香の近くに來た途端、男が笑顔で春香にそう言う。

「どうしたのよ冬矢^{ふゆや}」

春香がワザとらしく言葉を返す。

「いやあ。ちょっとお願いがあんだ。今日の放課後。屋上に来てくれないか。俺、待ってるからさ」

さっきまで笑顔だった冬矢が、急に真剣な顔つきになり春香に問いかける。

「う……うん。わかった。放課後だね」

緊張しているのか、うまく言葉を返せない春香。頬を少し赤らめている。

「おう。じゃあ、それだけだから。また放課後な！」

冬矢はそう言った後、急いで自分の教室へと戻った。

このとき春香は身にしみるほど感じた。これが雨鏡の作った新たな世界なのかと……

実は、春香は最近、冬矢との出来事と全く同じ体験をしたことがある。過去の出来事をもう一度自分自身の精神で体験しているのだ。つまりこの世界は、過去のリプレイ再生と、夢の世界観を組み合わせた世界。いわゆるパラレルワールド。

しかし、結末まで同じになるわけではない。あくまで過去の世界に夢の世界観を組み合わせただけなので、過去に戻ったその瞬間から未来の話は、全て予測不能な話。当然、ここで起こった出来事は夢の世界の話なので現実の世界には一切影響はない。

つまりこの世界では、自分が昔失敗してしまったことや、やりなおしたいことを、疑似体験という形で実現できる世界なのである。

春香は、冬矢との出来事をとて後悔していた。

春香は冬矢に密かに惚れており、屋上に来てくれと言われたときは、心の中でテンションが凄くあがったものだ。しかし、それと同

時に恐怖感や緊張感が生まれる。

このとき春香の精神は恐怖感と緊張感に負けてしまい、屋上に行くことが出来なかったのだ。

冬矢との出来事をずっと後悔していた春香の決心は既に固まっていた。

放課後。春香は屋上へと急ぐ。屋上には既に冬矢の姿が。

「ごめん。遅くなった」

春香が手を合わせて謝る。

「謝るのなんかよせよ春香らしくもない。俺のクラスが終わんの早かっただけだし」

手を合わせて謝る春香を見た冬矢は、笑顔で軽く春香の頭を軽く小突く。

「痛っ！ 何も叩く事ないじゃない。しかもグーで！ それでなによ。屋上に呼んだんだから、なんか用があるんでしょ？」

春香は強がりながらも、内心ドキドキバクバクしながら言葉を発する。

「おう。聞いて驚くなよ。そして笑うなよ」

冬矢は、息を精一杯吸い込み「春香。俺はお前の事が好きだ！！」と叫んだ。

叫んだ声は、学校中に響いたんじゃないかというくらい大きな叫

び声。これには春香も顔が真っ赤っ赤になる。

「ちょっと……そんないきなり……しかも声が大きすぎる……」

「そんなくらい俺の気持ちが強いつてこと！ さあ、春香姫。答えを！」

冬矢が片膝をつき、春香の方に右手を差し伸べる。そのポーズは、まるで王子様がお姫様をダンスに誘うあのポーズのようだった。

「そんなのOKに決まってるじゃない。私も冬矢が好きだもん！」

冬矢が差し出している右手を春香が両手でギュッと握る。

「本当に！？ 実は滅茶苦茶怖かったんだ俺。振られたらどうしようって。ありがとう。俺って幸せものだぁ！」

冬矢が、春香が握っている右手を不意にバツと振りほどき、ギュッと抱擁した。一体、あの右手の意味はなんだったのであろうか……

しかし、その時異変が起こる。なんと、冬矢の身体がドロドロと液体状に溶け始めたではないか。

その光景を目にした春香が「キャッ！」と言いながらその場を離れる。

その後、冬矢の身体だけではなく、自分がいる学校の世界までもがドロドロと溶けてゆく。

「な……なによこれ……どうなってるの……」

春香が、その光景を見てガチガチと震えだした。想像外の感覚に恐怖しているのだ。

その時、ドロドロと溶ける世界の先に一つの人影が見えた。

「春香さん！　よかった……気は失っていない！」

雨鏡だ。異変に気づいた雨鏡が、春香の下へやってきたのだ。そしてすぐに春香を現実の世界へと戻す。

現実の世界に戻ってしばらくの間。雨鏡がどれだけ起こしても起きなかった春香であるが、ようやくその目を開けた。

目を覚ましたことを確認した雨鏡は、今にも泣きそうな顔で「よかった。目を覚ました……大丈夫ですか？　頭がズキズキするとか痛みはありませんか？」と、必死な様子で問いかける。

問いかけられた春香は、恐怖を噛み殺したような笑顔で「大丈夫。それなりの覚悟をもっていたから」と言う。

「すみません。私のせいでこんなことに……私がもつとちゃんとコントロールできていれば……」

雨鏡が自分を責める。

「雨鏡さんは何一つ悪くないよ。これも全て私のワガママのせいだもん。雨鏡さんが自分を責める理由なんて一つもない。注意もしてくれだし、心配もしてくれた。それに、今も悲しんでくれてる。ワガママ言っただけだったのに、こんなに悲しんでくれてる。私が言いたいのとは文句じゃないよ。ありがとうって言葉」

こんなに心配して悲しんでくれている雨鏡のお陰なのか、さっきまでの恐怖を噛み殺したような笑顔ではなく、純真無垢な笑顔を雨鏡に向ける。

「春香さんの心遣いは嬉しいです。でも……」

「それ以上は言っちゃ駄目です！」

春香が、何かを言おうとした雨鏡を止め、自分が言葉を発する。

「雨鏡さんのことだから、発想がネガティブな方向に向いて、こんなことがあったからこの世界を封印しますみたいな事を言おうと思っただけでしょう？」

雨鏡は、凶星なのか少し身体がビクツとなる。

「ほらやっぱり。そんなことしちゃ駄目ですよ。確かに今回は失敗しちゃったかもしれないけど。でも、とっても素敵な世界だったよ。とっても楽しい思いをしたし、心も晴れたよ。それに……今日の体験が無かったら一生後悔している出来事をそのままにしていたと思う。私、今日の体験のお陰で、一つ決心することが出来たんです。だから、封印しちゃ駄目です。慣れない間は私が実験台になります。私、どれだけ失敗しても耐えますから。だから、封印しちゃ駄目です」

春香が一生懸命、雨鏡に自分の思いを投げかける。

「分かりました。それ程までに思ってくれているものを閉じ込めるのはいけないですね。この世界で何かを感じて、掴んでくれる人がいる。それってとっても素敵なことでもんね」

雨鏡に、春香が投げた思いが届いた瞬間である。

雨鏡の言葉を聞いた春香はニッコリと笑みを浮かべる。

「そうです。その意気ですよ！ あっ！ そろそろ帰らないと親に怒られてしまうので家へ帰らせていただきますね」

「もう、動いて大丈夫なのですか？ まだしんどのなら家へ電話を入れておきますが……」

家へ帰ろうとする春香を気遣い、雨鏡が声をかける。

「もう大丈夫です。多分、雨鏡さんが心配してくれたからですかね」
春香が雨鏡にニッコリと微笑みながらそう言い、家へと帰っていった。

そして次の日。バイトに来た春香が慌てながら雨鏡に話しかける。

「雨鏡さん！ 夢と話が違っじゃないですかぁ！」

なんと、春香は次の日の学校で、勇気を出して冬矢に屋上の件について謝ったのだ。

すると、屋上の件に関するある事実が分かった。

実は、冬矢が春香に屋上の件についてのお願いをした日は、テスト一週間前の日だったのだ。

更に、春香は学年でも常にトップ5に入るほど頭が良く、冬矢と

も仲がよかった。

なので冬矢は、頭が良く、親しい春香に勉強を教えてもらおうと思いい、春香を屋上に呼んだ。

これも、ただ単にみんなの前で勉強を教えて欲しいというのが恥ずかしかっただけで、どこか二人きりになれる場所はないかと考えたのが屋上だったのだ。

それだけの話を、春香は勝手な妄想で話を膨らましていき、結果、屋上には行かなかった。つまり自滅したのだ。

それからというもの、冬矢は、春香が屋上に来なかったのは、春香に嫌われているんじゃないかと思い、話しくなくなり、春香は、屋上に行かなかった罪悪感と、何を話したらいいか分からない乙女心により話しくなくなる。

本当はどっちも気まずさが残り、このまま終わりのはずだったのだが、雨鏡の平行ワールド体験により、春香に屋上の件を謝る決心がつき、事実を知ることができたのである。

この話を必死に語る春香を見て、雨鏡は思わず笑いがこみ上げてしまった。

「何が可笑しいんですか！」

当然、春香が笑っている雨鏡にツッコむ。

「すみません。いやあ、夢ですので現実と同じ結果になるとは限らないですよ。言い忘れてましたっけ？」

「それは聞いてましたけど……まさか、ここまで違うとは思わないじゃないですか！ あゝあ、私の恋も終わりなんですかねえ」

春香がため息をつきながらそう言う。

「いや、それは違いますよ。事実が分かった後、何か展開がありませんでしたか？」

「そうそう！ また次のテストのとき勉強教えてって言われました！」

「ほら。新たな道が開けました。まだ終わってなんかいいですよ」

夢とは所詮夢。現実の世界で夢の世界と同じことが起きるとは限らない。

でも、それがきっかけで勉強を教える・教えられる関係になった。

パラレルワールドに行かないままだと、この関係も作られることはなかっただろう。

どんな出来事でも、逃げていては道は開けない。どんな形であろうと何かしらの行動を起こせば先の道は見えてくるのだ。

「そつかあ。そういう考え方もあるんですね。また雨鏡さんに励まされちゃったなあ。本当にありがとうございます」

春香が笑顔で雨鏡にお辞儀をする。

「いえいえ。それより気になったんですが、春香さんの話だと、テスト一週間前にバイトしてたってことですね。自分で言うのもおかしい話ですが、別にこの店は、特にする仕事もないんですし、テ

スト休暇とっても全然いいんですよ」

「大丈夫ですよ。ちゃんと店の仕事終わった後に、雨鏡さんに見つからないように勉強してますから！ 頭の良さを保つには努力あるのみなのです」

春香は、エッヘン！ といった態度でそう言った。

「それって自慢にならないでしょ！ まあ、暇だからいいんですけどね」

そんな春香の爆弾発言も、雨鏡は笑って受け止める。

「やっぱり自慢になりませんよね……？ ようし、今日はサボってテスト勉強してた分、頑張って働きますよお。何でも命令しちゃってくださいね！」

春香はいつにもましてやる気満々なようだ。顔が活き活きとして
いる。

「特に……ありません……」

やる気満々の春香を見てなのか、雨鏡が遠慮がちにそう言葉を返す。

「やっぱりそうですか……じゃあ、いつも通り掃除してきます！」

春香は勢い良く部屋を飛び出し掃除を始めたのであった。

悩みが取り除かれた春香の顔は、とても輝いていて生氣に満ち溢

れている。

この顔こそが、どんな言葉を並べても太刀打ちできない幸せの証なのであろう。

雨鏡が新たに作ったパラレルワールドという世界は、少なくとも春香という人間を少し幸せにしたのだ。

人を不幸にするのは案外簡単なもの。逆に幸せにするのは難しいもの。

だからこそ、少しでも幸せになったときはとても嬉しい。そんな体験をしたから春香は必死で雨鏡がパラレルワールドを封印しようとしたのを止めたのであろう。だからこそ、春香の思いは雨鏡に届いたのだろう……

ちなみにこのパラレルワールドは、春香の協力により完全にコントロールすることが出来るようになった。すなわち、雨鏡に新たな世界が増えたのであった。

D r e a m 9 青春時代の苦い思い出

今回来店した客は、十数年前、野球の名門高校である倉田高校で、三年の夏に地区大会決勝まで勝ち進んだ実績を持つ、仙一という男。

今は26歳の会社員であるが、現在でも社会人野球選手として活躍している。

仙一が高校を卒業して就職した今でも、社会人野球選手として野球を続けているのにはわけがある。

仙一は、地区大会決勝で苦い経験をした。

九回裏。得点二対一。ランナー満塁。ニアウト。こんな緊迫した場面で八番バッターの仙一に出番が回ってきた。

バッティングよりも守備に長けている選手だった仙一。あまりバツティングに自信がなかったせいなのか、打てば逆転の可能性があるとプレッシャーのせいなのか、バットも振れず三振に終わってしまう。

仙一はずっとその出来事を後悔し続けていた。

あの時の悔しさから、もともとと練習して、いつかりベンジしたいという一心で野球を続けているのだ。

リベンジ……そんな夢のような話が叶うはずがないと分かっていた。それでも叶うと信じた仙一。そんなとき、ここ夢屋を見つけ「もしかしたら気持ちだけでも……」と思い、夢屋に足を運んだのである。

「ということは、その九回裏の対戦をもう一度やりたいということ
で？」

「ええ。ずっとそれだけを考えてきて生きてきたようなものですか
ら」

「分かりました。わざわざお話してくださりありがとうございます。
では……」

仙一は、雨鏡の手によって夢の世界へ……

仙一が気づいた時、仙一は自軍のベンチに座っていた。その場面
は丁度、バッター満塁になったところで、どちらの応援団の気合も
120%。物凄い盛り上がりを見せている。

そして、落合仙一君というアナウンスがかかり、仙一がバッター
ボックスに入る。

バッターボックスに立った仙一は、八年前の自分と違い落ち着い
ていた。むしろ、八年振りの緊張感に胸が高鳴る。

（本当に同じだ。この緊張感は、いつになっても変わらない。相手
の闘志が、いや会場全体に闘志を感じる……俺は……凄いところに
立っているんだな）

バッターボックスに立つただけで、額から汗が流れてくる。それ
だけ熱い闘志が会場全体を包んでいるのだ。

そして、ピッチャーの一球目。内角ギリギリのストレートでスト
ライクを奪う。

（今は撃てたボールだ……何を恐れている仙一。俺は何のために今まで野球を続けてきた。そうだ。こういうプレッシャーに打ち勝つためだ。なのになぜ恐れている。恐れる必要など何もない。振れ。振るんだ仙一。振らないとボールは飛ばない。振らないと前へは進めない！）

仙一は戦っている。プレッシャーという魔物相手に打ち勝つために……

ピッチャーの二投目。仙一は思い切ってバットを振った。仙一がプレッシャーに打ち勝ったのだ。

振ったバットはボールを捕らえ、真っ直ぐ空へと吸い込まれてゆく。

バッターが、ピッチャーが、監督が、チームメイトが、応援団が、観客が……ボールが空へ吸い込まれてゆく瞬間を目撃する。

ボールにはあらゆる感情がこもった視線が送られる。この瞬間、会場が一つになり、自分達が今、どこにいて何をしているのかというのを再実感させてくれる。まさに、最高の瞬間だ。

空へ吸い込まれてゆくボール。しかし徐々に勢いがなくなり、空から地へ、ボールが舞い戻る瞬間だ。

入るか。入らないか。そのぐらいのレベルまでボールは舞っていた。

そして、地へ舞い戻るボールにセンターが飛びついた。

会場全体がボールに飛びついたセンターに注目する。ボールを捕

っているか、捕っていないか……この違いだけで勝負というものは180度変わる。

センターがグラブを開いたそこにボールはあった。つまり、アウト……試合終了だ。

結局、外野フライという結果に終わった仙一。しかし、悔いはない。仙一はバットを振ったのだ。今までの集大成が、バットも振る事が出来ずに三振から、ボールを捕らえての外野フライになったのだ。

確実に進化している。それは、自分でもひしひしと感じてくる感覚であった。

そして、現実の世界へと戻る。

「どうでしたか。自分の納得いく結末にはおなれになりましたか？」

「ええ。野球やってて本当に良かったって思えましたよ。振れたんですバット。これって大事なことなんですよね。あの時の俺は勝負すら出来ませんでした。あんな場面で逃げてたんです。でもね、俺バット振れたんですよ。勝負できたんです。ピッチャーとバッターっていう勝負が！ そのときに思ったんです。成長したなって。この感覚って中々味わえないことだと思いませんか？」

仙一が、子どものような顔で雨鏡に問いかける。その姿はまるで青春時代を生きる学生のようにであった。

「確かにそうですね。私も……ああ、これは私しか味わえない話なんです。新しい世界を作れるようになったときなんか成長したって思いますね。これで、お客様に新しい喜びを味わってもらえる。」

そんなこと一日中考えちゃったりします。でも、そんなことって中々味わえないんですよね。成長したって実感するには、実感するほどの苦勞をしないとイケない。苦勞を乗り越えてこそその成長なんですよね」

雨鏡も真剣に言葉を返す。かなり、仙一の言葉に共感しているようだ。

二人はそれから二時間ほど語った。雨鏡が客とここまで長話するのは初めてのことである。

「おっと、長話になってしまいました。そろそろ行きます。では、お代をここに。また何かあったらここに來ます。店の主人はいい人で、仕事も夢を感じれる最高の仕事だ。本当にここにこれてよかった。では……」

仙一は、笑顔で店を去った。

仙一はこれからも野球を続けていくのであろう。今日の体験により、野球魂が再充電されたのだから……

Last Dream 現実世界。夢の世界。

時は流れ、季節はクリスマス。

この日、雨鏡は春香に、都会にある巨大クリスマスツリーを見に行かないかと誘われた。

雨鏡は、現実世界で誰かと何かを見に行くというのは初めてのことなので、この日は店を休み、快く、ワクワクしながらOKした。

そして春香と雨鏡が合流。

すると、春香の後ろから、元気よく夏樹が飛び出してきた。

そう。今日は春香だけではなく、夏樹も一緒にクリスマスツリーを見に行くのだ。夏樹が行きたいと聞かなかつたらしい。

「雨鏡さん久しぶりい！ 結局、あれから店に足を運ばなくてごめんね。春姉が働いてるからなんか行きづらくて……ちゃんと仕事してる春姉!？」

「し……してるわよ。そうですよね雨鏡さん！ 私、役に立ってますよね!？」

春香が雨鏡の方を見る。その目は、なぜかとても真剣な眼差しをしていた。

「ええ。春香さんはとっても役に立っていますよ。といっても私の店はやるのがほとんどないんで、掃除をしてもらってるだけですけどね」

雨鏡は、ハハハと笑いながら迷わずそう答えた。

「なんだか微妙だなあ……」

夏樹が首を傾げる。

「まつ、まあいいじゃない。とにかく見に行きましょうよ。とっても綺麗みたいですよ!」

「だね!」

そう言った途端、春香と夏樹が急に走り出した。

人に了解をとらずに勝手に行動するところはやっぱり姉妹だなあ
と思いながら雨鏡も二人の後を追う。

チラチラと雪が舞う中、三人はクリスマスツリー目指して走る。
そして、クリスマスツリーの前に着き、クリスマスツリーを見た
とき、雨鏡は心を奪われたように立ち止まった。

「やっぱりこのクリスマスツリーは綺麗ねえ。迫力もあるし。来て
よかったね夏樹」

「うん。とっても綺麗! 雨鏡さんもそう思うでしょ……雨鏡さん
?……」

夏樹が勢い良く雨鏡の方を振り向いたとき、雨鏡は瞳から涙を流
していた。

雨鏡が初めて自分の目で覗き込んだ大きなクリスマスツリー。
それは、とても綺麗で、頑張ろうっていう力をもらえて……

雨鏡は心の中で思った。現実世界にもこんな綺麗なものがあるのかと、こんなものがあるなら夢の世界は必要ないんじゃないか。

だが、その考えは口に出すこともなく、すぐに心の中で否定した。

そうじゃない。確かに現実世界のクリスマスツリーは心を奪われるくらい綺麗だ。だからって夢の世界が必要なのか必要じゃないのかなんてことは何の関係もない。夢の世界にだって夢の世界のいいところがある。自分は、心を奪われるくらい綺麗なクリスマスツリーを見て感動して泣いている。ただ、それだけのこと。比べるものなんて何もない。比べることではない。

「雨鏡さん……どうしたの？ お腹痛いの……？」

雨鏡の涙を見て、夏樹も泣きそうになりながら雨鏡に話しかける。

「いえ。大丈夫です。あまりにもツリーが綺麗だったものですから、深くにも涙が流れてしまいました。心配かけてすいません」

雨鏡が、涙を流しながら夏樹に笑顔で言葉を返す。

「そんなとこだろうと思いましたよ。雨鏡さんは変に真面目なところありますもんね。でも、本当に綺麗」

「嘘だあ！ 春姉も絶対に心配してたくせに大人ぶっちゃってえ」

「そつ……そんなことないわよ。私は本当にそう思ってた！」

夏樹と春香がちよつとした言い争いになりかける。

「まあまあ……そんなことで喧嘩しててもキリはありませんよ。それより、これからツリーが見える場所でご飯でも食べませんか？ 私が奢りますので」

「えっ。奢ってくれるの！ やったあ！」

「嬉しいですけど大丈夫なんですか。その……お金のほうは？」

「ええ。なんとか無理してみますよ。じゃあ、行きましょうか！」

この世界は比べられることなんていくつでもあるけれど比べる必要なんてない。

今、自分が自信を持ってしている何かに誇りを持って生きていければそれでいい。

しかし、この世界の人間達は、自分が自信を持って好きといえる何かには色眼鏡を装着してしまう。

でも、それでいいと思う。自分の好きな何かが一番と語るのは全然いい。

他の何かと比べてしまうのが駄目なだけ。何でもいい。どんな何かでも、誇りを持って行動しているのならいいところは必ず存在する。

それを無視して、これはいい。あれは駄目。と比べてしまうのが駄目なだけ。

そうした意識の中、雨鏡は自分の身が果てるまで夢想屋を続けていくことだろう。

自分の中にある夢の世界という誇りがある限り。

Last Dream 現実世界。夢の世界。（後書き）

いきなり物語を終わらせてしまい申し訳ありません。

本当、情けない理由なのですが、プロットをほとんど決めないまま書いていたので話が浮かばなくなったのです。それで、この作品はここで終わりにしようと決断しました。

でも、この作品で学んだことはあります。

プロットはちゃんと決めてから書くこと。これは凄く大事なことだと思いました。この作品を生かして、今度はちゃんとプロットを決めてから書くように思います。

こんな形で作品を終わらせてしまいすいません。そして、ここまでお付き合いいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9999d/>

夢想屋

2010年10月9日04時57分発行